

舞鶴市糸井文庫蔵 『新版 龍宮洗濯嘶―芋蛸の由来―』

翻刻・語釈・抄訳および英訳

畑 恵里子、原 豊二、西野 由紀、園山 千里、荒川 吉孝

1. はじめに

舞鶴市糸井文庫蔵『新版 龍宮洗濯嘶―芋蛸の由来―』（上巻・下巻）を取り上げ、翻刻に加えて、語釈・抄訳・英訳を施した試みである。

近世文化を踏まえた翻刻・語釈を西野が、抄訳を畑が、英訳を荒川が担当した。翻刻において原・園山・畑が意見を提示し、英訳において園山・畑が意見を提示した。全作業において畑が検討・決定して、確認を行った。なお、いずれを漢字もしくはかなと判断するかは、無論、読者の権利である。

2. 翻刻・語釈

〔凡例〕

- ・翻刻にあたり、かな遣いは原則として原文にしたがい、句読点および濁音・半濁音については適宜ほどこした。
- ・原文にふりがながある場合はすべて付し、さらにこんにちの一般読者の便宜のために必要であると判断したものにはふりがなを付した。
- ・ふりがなについてはそれぞれ語の直後の（ ）内に記した。
- ・原文に促音・拗音がある場合はすべて小さく表記した。

- ・原文が漢字表記の場合であってもひらがなに改めたものがある。また、原文がひらがな表記の場合であっても漢字に改めたものもある。
- ・漢字の字体や送り仮名の用法は、こんにちの一般的なものにできるかぎり近づけた。

其↓その 此↓この 事↓こと 也↓なり

おもふ↓思ふ やみ↓闇

- ・左記の文字は原則としてそれぞれひらがなで記した。

八↓は 三↓み 川↓つ

- ・繰り返しをしめす踊り字（く、ゝなど）はそれぞれもとの字に置き換えた。

- ・改行やカギ括弧は適宜ほどこした。

- ・文字の判読が不可能な箇所は□で示した。

- ・底本は舞鶴市糸井文庫を使用した。

●上巻

（一丁表）

不義にしてとみたる時は、うかめる雲のごとく、正直は一旦の依怙にして、ついには神明の加護むなしからず。ここに龍宮城の主、七代龍王と申し奉るは、生得（しゃう・とく）温順にましましけるを、いつ

の頃より蛸の入道八足、この佞奸邪知（ねい・かん・ぢゃ・ち）の舌頭（ぜっ・とう）を動かし、おもねりへつらいければ、龍王、彼が弁舌に迷い給ひ、総海の政道みな入道に取り計らはせらる。これによつて譜代の近臣、心あるうろくずは、忠節全たしといへども尾ひれをふる事あたはず。皆々入道が振る舞いをつまはじきしてぞ憎みける。蛸には人のくらいこむも、こんな事なり。

【語釈】○うかめる 入道にはずれたことをして得た富貴は浮き雲のようにはかないものである。『論語』述而の「子曰、飯疏食、飲水、曲肱而枕之。樂亦在其中矣。不義而富且貴、於我如浮雲。」による。

○正直は一旦の依怙 正直に生きることはただちに利益につながるものではないが、きつといつかは神仏の憐れみをうけることになる。「正直の頭（こうべ）に神宿る」と同義。○蛸の入道 蛸の頭が剃髪した僧侶に似ているため、蛸の異称となる。また、剃髪した者を嘲ることばとして用いる。「蛸入道」とも。○佞奸 表面では従順であるように見せかけ、心は悪く拗れていること。口先が巧みで、悪賢く拗れていること。○邪知 悪知恵。正しくない知恵。○舌頭 ことば。弁舌。○政道 領土・人民を治めること。まつりごとの要諦。○譜代 代々、ある家に仕えてきていること。また、その人。本作品には龍王の治政を江戸幕府に見立てた表現があり、ここでも関ヶ原の戦い以前から徳川氏に臣従した者の意をふくんでいるとみられる。○うろくず 鱗を持つものの総称で、魚介をさす。

（一丁裏・二丁表）

然るに龍王、御心地例（れい）ならず。次第に御脳（ご・のう）おもらせ給へば、龍宮の騒動大かたならず。典薬の頭（かみ）鱸大庵、鳥賊の甲庵（こう・あん）、そのほか医術に優れたものは貴賤を厭わず宮（くう）中へ召し集め、各々しょじゃうにさじをふるい、額に頻波（しき・なみ）を寄するといへども、さらにそのしるしなく、ときに鳥賊の甲庵申しだしけるは、「これ全く、先年乙姫君の御病状としばしばあい似たり。男女の隔てあれども、またまた猿の生肝をもつて丹薬（たん・やく）を調合なして差し上げなば、早速御脳平癒あらん。」と申し上ぐる。これによって、先例に任せ、老臣万代（ばん・だい）龜之進へ仰せつけらせんと評議ある。入道すすみいでて申しけるは、「この義、余人に仰せつけられ、しかるべし。先年生肝の用に立てたる猿の子孫、いまだ野山に繁盛すとうけ給る。さあるときは親の命をたばかられたるその恨み、報はずんばあるべからず。しからば再びこの良薬調合する事難し。是非是非余人へ仰せ付け候へ。」と弁舌潮を流すごとく。誰あつて一言申いすす者もなかりけり。鮪は下魚（うを）なれ共、入道にとり上られ奥勤めとなりけれども、そのくせ止まずして、はしたなく透き見をする。

鮪「おやおや。」

「御渴きがありますから、少々せつちようを用いませう。」

「悪水におあたりなされたとおみうけました。御当分の事でいらっしやればいいが。」

「定齋粉（ぜう・さい・こう）が咳に少々加味いたしてはいかがでござろう。」

「脈微弱なるときは、汗すべからずでござる。」

「なるほど。」

【語釈】○おもらせ 重くする。負担をかける。 ○大かたならず

並大抵ではない。 ○典薬の頭 本作品では徳川幕府の職名で、官医の最上席。「譜代」という表現とおなじく、龍王の治政を江戸幕府に見立てているか。 ○烏賊の甲庵 烏賊の甲は薬用にももちいられたため、それをもじった名か。 ○猿の生肝 病気をなおす妙薬といわれる猿の生肝を取りに龍王からつかわされた水母が、猿をだまして連れて帰る途中、その目的をもらしたために、「生肝を忘れて来た」と猿にだまされて逃げられてしまい、その罰として打たれたため、それ以後水母には骨がなくなってしまうという説話群がある。そもそも動物の生肝は薬功があるとされていた。本作品ではこれをふまえ、烏賊の道庵が龍王に「猿の生肝」を服用するよう進言している。 ○丹薬 練って作った、不思議な効き目のある薬。 ○調合 薬などを、それぞれ決まった分量にしたがって混ぜあわせること。 ○下魚 下等な魚。値段の安い魚。 ○透き見 物のすきまからのぞき見ること。のぞき見。

(二丁裏・三丁表)

伊勢海老蔵、荒海進みいでて申しけるは、「入道殿の一言、その理ありといえども、このたびの御用、余人に仰せつけらるるといふとも、誰かよく背中に人を乗するの術、おぼつかなし。さるによって乙姫君の恋君浦島殿をも向かいさせ奉りし。その功、莫大なり。このたびにかぎってこの役目を余人に譲らば、いかで本意(ほ・い)なく思ふら

ん。是非この役目は綸言(りん・げん)のごとく、亀之進へ仰せ渡されしるべし。」と面色角目立って申しける。入道も丸(まる)き眼(まなこ)をいからし、口をとがらせて、双方潮をけたてて争いける。世に水掛論の始まりなり。龍王大きに逆鱗ましまし「総海をさばく入道が一言(いち・ごん)、その理おもしろし。これを遮り争うは鼯鼠(ひいき・え・こ)の沙汰なり。」とて、海老蔵はその場より御勘気(かん・き)を蒙(かうむ)りける。佞魚(ねい・ぎょ)時を得て、忠魚身退く。海老蔵が心のうち、さこそ口惜しからん。凱に誇る蛸の入道、「いま一言(ごん)いふてみよ。斬って斬って斬り砕き、酒の肴にしてくれん。」

「両魚とも、静まれ静まれ。」

「ヤア、ここの芋掘り坊主めが。」

「およばぬ事を、げに鯛めが。真つ二つにして寄合茶屋の引物にするぞ。」

【語釈】○恋君 恋い慕うお方。恋人。 ○面色 顔の表情。 ○角目立って目かどをたてる。互いに感情を害して荒くあたる。 ○けたてて 蹴って、足に触れるものを立たせる。ここでは蹴って潮水を立てている。 ○水掛論 双方が互いに自分の立場、主張を固執して言い張って、はてしなく争うこと。また、双方とも互いの理屈を繰り返し、解決しない議論。ここでは伊勢海老と蛸との言い争いに、潮水を蹴立てているようすを掛けて表現している。 ○さばく うまく処理する。始末をつける。 ○鼯鼠(ひいき) 「依怙(ひいき)鼯鼠」のこと。自分の気に入りの者や関係のある者だけの肩をもつこと。 ○勘気 目上の

人から、咎めをうけること。臣下、奉公人、子どもなどが、主君、主人、親などの怒りにふれること。○佞魚 口先が上手で、心のよこしまな人を「佞人」という。これにより、本作品では人でなく魚介が登場するため、「佞魚」と表現している。○時を得て 時流に乗って栄える。権勢をふるう。○身退く 潔く辞職して立ち去る。○酒の肴 酒のつまみ。○芋掘り坊主 何の取り柄もない坊主。学徳のないだめな僧を卑しんでいることば。○寄合茶屋 寄り合いなどをおこなうときに借りる料理茶屋。○引物 引出物のうち、とくに供応の膳に添えて出す肴・菓子などという。

(三丁裏・四丁表)

かくて亀之進はこの事を伝へ聞き、海老蔵が行く末を憐れみ、かつ入道が邪(よこしま)を憎み、功成り名遂げて身退くの本分このときこそと、妻子眷属(さい・し・けん・ぞく)を集め、密かにその用意を成し、「とかくさわらぬ蛸に祟りなし。親も逃れてやあ子も逃る。」と一首の歌を残し立ち出づる。

「蛸蛸干蛸、あうたら煮て食おう、足りたら酢蛸にしよ。」

街道の万年屋にするよしもあれば、まづ川崎へ心ざし、品によらば、江戸の尾張丁へ落ち着かん。

石上に甲を干して下水に死するとも可なり。

「亀とみられて仇(かたき)にされました。」

亀之進は行方知れず。海老は勘気の身となりければ、今は誰はばかる事もなく入道勅命を蒙(かうむ)り、過ぎし頃さすらへせられし不忍の籠こそ日本の様子詳しければとて、種々の謀(はかりごと)を伝え

て日本へ猿の生き胆を取りに遣わしける。鼈は蛸が推挙によって勅免を蒙り、日本へ立ち返り、まづ猿屋町(さる・や・まち)へと志しける。

「お前のような客は、わっちらが方(ほう)じゃア、やまさんといいがす。」

「なんでも亀が手柄をかきおとすは、おぬしが働き次第さ。」

「ついでに浅草の寺内(ぢ・ない)の内に行くとか、末はねへかみてくれる。」

【語釈】○干蛸 干した蛸。○酢蛸 茹でた蛸をうすくそぎ切りして酢にひたした料理。○万年屋 東海道の川崎宿にあった奈良茶飯

で有名な茶店。○品によらば もとは「品に依る」で、場合によるの意。ここでは、場合によっては。○尾張丁 「尾張町」で、現在の東京都中央区銀座五・六丁目にあたる。慶長八(一六〇三)年に尾張藩が土地を造成したことにちなむ地名。○下水 台所や風呂

場などから流れる水や、汚れた雨水を流すために作った溝。○不忍 「不忍池」のことで、現在も東京都台東区上野公園にある池。寛永元(一六二四)年、忍岡に東叡山寛永寺が建立された際、忍岡は比叡

山に、池は琵琶湖に見立てられ、島に弁財天が祀られた。○猿屋 浅草にあった地名で、現在の東京都台東区浅草橋二・三丁目あたり。寛永七(一六三〇)年の町屋の起立以前、越後国猿屋出身の猿屋加賀

美太夫という舞太夫が当地に居住していたことにちなむ地名。本作品では「猿の生肝」を得るため日本にやって来たので、地名に猿のつく当地を登場させたか。○わっちら 一人称。単・複数のとちらの場

合にも用いる。○やまさん 江戸時代、遊里で武士の客をいう語。挿絵をみると、亀之進は二本差しに羽織袴姿で描かれている。○がす 「がんす」の変化した語で、ございますの意。○寺内 寺の境内。ここでは、東京都台東区にある金龍山浅草寺をさすか。○くれろ 補助動詞として用いられ、多く動詞の連用形に接続助詞「て」を添えた形につく。話者または話者側の者に対してなされた他者の行為の下につけて、その行為が好意的になされたり、こちらに利益や恩恵をもたらしたりするものであることをあらわす。

(四丁裏・五丁表)

それより御蔵前を過ぎ、諏訪丁へ差し掛かりける。かたわらに「御鍋焼きつけめし大蒲焼」と筆太(ふで・ぶと)に書いたる行燈(あん・どう)目(や)を驚かし、そもかづかづと心細く、中々進みがたければ、門端(かど・ばた)へ心ざし、川伝いに行かんとすれど、手足すくんで心ならずも鰻屋の盤台へがたと突き当たりければ、内より屈強の若い者出でたたって、「さてさて大きな鱈、今日は思はぬ銭儲け。こはござんなれ。」と尻こぶたをしづめて捕らへける。その力骨身にこたへ、振り放す事能はずとて、研ぎ澄ましたる小刀(こ・がたな)のみはずたずたに、煎り付けの山椒とともに焼鍋の匂ひにその名を残しける。昨日まで橋の羽目に住んで、橋の上の手拍子に頭(かしら)を出し、煎餅、軽焼のあてなるころあいに夜間を楽しみしが、今日はまな板の雫とてせうこのはらにおさまり、かさいの水屑となる。ああ惜しむべし惜しむべし。

「もしもし、おがみの蒲焼きで鱈はよしにしてくださいまし。ああ、

なささけない、なささけない。」

「こいつはたびだから身が少なへ。しかし二本ンぐらいはしつかりだ。」入道は鱈が便りをいまやいまやと待ちいたれども、その訪れもなければ、「こは如何にせん。」とたちまちひとつの謀(はかりごと)をもおけ、「鱈生き肝を持ち帰りし。」と披露なして、ひとつの唐手(とうの・いも)を壺に入れて、さもうやうやく御前へ携さへける。甲庵、喜んで蓋をとれば、肝にはあらで芋なりければ、龍王大きに急かせ給ひ、「こはそも如何なる事ぞ。」と御尋ねありける。入道謹んで申す処、「山猿ひっ引き、潮境(しほ・ざかい)まで召し具し候ゆへ、右の次第を申し聞かせ、無二無三(む・に・む・さん)に胸上(むな・うへ)を断ち割りしに、あまりに仰天いたし候ゆへにや、肝はつぶれて芋になり候。」と申しあぐる。鳥賊の甲庵、首をひねって「これ全く俗説にして、意のとるべきところにあらず。」と思へども、入道が勢ひにのまれ返するうへは「用ゆるとも益なし。」と心ならずも退出しける。甲庵が妙術(めう・じゅつ)も空しく、あまつさへ龍王は崩御ましましける。宮(くう)の中上(うへ)を下へと混雑して海中のうろくずその▲嘆きいる場合は、「そや情けなくも君を偽り奉りし天罰、如何で逃るべき。肝がでんぐり返るとは田舎娘の本文にもござります。」

【語釈】○御蔵前 浅草御米蔵西側をさす通称。蔵前ともいう。元和六(一六二〇)年の御米蔵設置後、江戸時代中期から蔵の前(西)側は御蔵前と称されるようになり、蔵米をあつかう米問屋や札差の店が立ち並んだ。○鍋焼き 鳥肉、魚肉、野菜などを鍋に入れ、味噌や醤油で味つけた汁で煮ながら食べる料理。○蒲焼 鰻や泥鰌、穴

子、鰹などを背開きにして骨をとり、ほどよく切って串に刺し、蒸してたれをつけて焼いた料理。もとは、鰹を開かずじまるのまま縦に串刺しにして焼いた。その形、色が蒲の穂に似ていることにちなんでこの名がついたという。○筆太 文字を肉太に書くこと。四丁裏の挿絵の右端にみえる店先行灯にも「江戸前 大蒲焼」の文字が筆太に書かれている。○門端 門のあたり。門のそば。○鰻屋 鰻の蒲焼や川魚料理を食べさせる店。つかまえにくい鰻でさえ楽々とつかまえてしまう鰻屋の腕前にかかつては籠が逃げられるはずのないことから、どんなに努力しても逃れることのできないことをいう「うなぎやの籠」ということばがあった。○盤台 魚屋などが用いる浅くて大きな長円形のたらい。○屈強 きわめて力が強いこと。○銭儲け 金銭を儲けること。○ごさんなれ 手ぐすねひいて待つさまをいう。さあ来い。よし来た。○尻ごぶた 本文では「尻ごぶた」とあるが、文脈から「尻こぶた」とした。「尻こぶた」は、尻の、肉の多い左右のふくらみ。○骨身にこたへ 骨にこたえる。○振り放す 振ってはなれさせる。振り放つ。○研ぎ澄まし 刃物や鏡などを磨いて、少しのくもりもないようにする。○ずたずた こまかく、きれぎれのまま。○煎り付け 煎り付けること。多く魚料理にいう。○焼鍋 食品を炒め焼きにするのに用いる鉄鍋。○煎餅 菓子のひとつ。古くは唐菓子として伝わった、水でこねた小麦粉を油で炒ったものという。米粉を主材料として醬油で調味した塩煎餅系のもの、小麦粉、砂糖、卵などを混ぜて型に流して焼いた瓦煎餅系のものに大別できる。○軽焼 糝粉（しん・こ）に砂糖を加え、軽く焼いた煎餅。○あて 酒のさかな。つまみ。○ぜうご 上が広く、下が細くすぼ

まって、穴のある金属または木・竹製の器。ろうと。○かさいの江戸湾を「葛西」沖と見立てた表現か。○水屑となる 水中で死ぬ、溺死する意のたとえ。○よしにして 「よしにする」で、やめにする。○こいつ 「こやつ」の変化した語。他称。「これ」に対して話題の人物を罵ったり遠慮なくいったりする場合、または乱暴な話し方で事物をさす場合に用いる。○しつかり 物の関係・度合いなどが、はっきりとしているさま。○唐芋 里芋の栽培品種。海老芋。○急かせ 急がせる。急きたてる。○潮境 互いに異なった性質の海流が接触する境目。○次第 物事の事情や由来、理由、なりゆきなど。○無二無三 脇目もふらず、一途になること。○断ち割り 切って分けはなす。切りさく。○俗説 明確な根拠もなく、世間一般に言い伝えられている説。○心ならずも 不本意ではあるがやむを得ず。○あまつさへ 物事や状況がそれだけでおさまらないで、さらに余計に加わる意を表わす。そのうえ。○上を下へ 上にあるべきものを下に、下にあるべきものを上にする意から、混乱するさまをさす。もとは「上を下へ返す」。○混雑 ごたごたすること。採めること。○▲ 丁をまたぐ、あるいは同丁のうちで異なる箇所
に文が続く目印としてもちいた記号。○情けなく 情容赦なく、残酷である。ひどい。○でんぐり返る 事態についてゆけないぐらいがらりと変わる。

(五丁裏)

七代龍王、崩御ましましければ、娑伽羅（しゃ・がっ・ら）龍王、跋難陀（ばっ・なん・だ）龍王をはじめ、各々、宮（くう）中へ集まり、

評定まちまちなり。御総領は姫君なればとて、弟御の御子を御位(みくらい)に薦め、これを八代龍王とかしづき奉りける。されどもいまだ御幼稚にましませばとて、姉姫君と浦島の御中に出生(すゅつ・しやう)ありし水江(みづのへの)小太郎と申すを、御若年なれども、聡明の君なれば、龍宮の補佐として総海の政道(せの・とう)をとりはからはせらるるべしと一決しける。しかるにこの君、温良恭慶(おん・りやう・きやう・けい)にして万魚(ばん・ぎよ)を哀れみ給ひしかば、四海おだやかにして佐渡の湊に舟も繋かず、ようやく激浪(げき・ろう)の憂いを忘れける。先君の御勘気をうけし海老蔵を免許あつて「なを忠勤を励むべし。」とて、またまた身退きし亀之進が行方を御尋ねあるべしとなり。

「にわか御評定とはなにさま、合点がいかぬ。急げ急げ。」
「くろ山を見るよふだが。」
「おやおや、評定のう。」

【語釈】○沙伽羅龍王、跋難陀龍王 ともに、『法華経』説法の座に列したという八種の龍王つまり八大龍王のひとつ。『法華経』には難陀(なんだ)龍王・跋難陀(ばつなんだ)龍王・沙伽羅(しやがら)龍王・和脩吉(わしゅきつ)龍王・徳叉迦(とくしゃか)龍王・阿那婆達多(あなばだつた)龍王・摩那斯(まなし)龍王・優鉢羅(うはつら)龍王が八大龍王として説かれている。本作品では、歴代龍王が八大龍王の合議によって決められるという設定になっている。○総領 とくに、長男、または長女をいう。一番上の子ども。○弟御「弟(おとと)」の敬称で、「御」は接尾語。○御中 腹(お腹)を

さすことば。もとは女性語。○出生 生まれでること。○小太郎 太郎という人の子に名づける名。このことから、水江浦島を太郎の名で呼ぶことを前提としているか。○若年 年の若いこと。また、経験が少なく成人として見られないこと。近世期には一七歳から一七歳までの呼称としても用いられた。○補佐 助け、補うこと。付き添って力を添えること。また、その役やその人。また、江戸幕府で、将軍が幼少のときなどに臨時に設けて、将軍を助けて政治に当たった職。また、その人。本作品には、龍王の治政を江戸幕府に見立てた表現があり、ここでも後者の意をふくんでみるとみられる。○一決 ある物事についての議論や相談で、一つの結論や決定が出ること。意見などが一つに決まること。○温良恭慶 「温良」は人柄が穏やかで、素直なこと。「恭慶」はうやうやしく祝うこと。ここでは、水江小太郎が穏やかで周囲に敬意をはらう人物であることを表現している。○激浪 物事の勢いのげいさまたとえ。怒濤。○免許 ある特定の事を行なうのを官が許すこと。許可すること。ここでは、政道を司る者が赦免する意として用いている。○忠勤 忠義の心を尽くして、主君・主人に勤め励むこと。○合点がいかぬ 「合点がいく」で「物事の事情がよく理解できる、納得できるの意。多く、打消をともなつて用いられる。

●下巻

(一丁表)

蛸の入道は思ひもよらぬ小太郎殿の聡明に見抜かれ、所詮安穩(あん・おん)なるまじと思ひ、このままに朽ち果てんも口惜しければとて、

鮫、鯨の大魚を語らひ、ちくうが沖に城郭を構へ、多くの芋を蓄へ兵糧（ひやう・ろう）の用意をなし、すでに籠城（らう・ぜう）の聞こへありければ、小太郎殿は賢慮深うましまし、「事荒だてなば、目の前の大事ならん。」と海老蔵、荒海（あら・うみ）に計り事を示し、宮（くう）中へ灰を撒き散らし、さて入道が方（かた）へ使者をもつて仰（おふ）せこさるるは、「先君の御心にかないし入道なれば、またまた八代龍王が管領（くわん・れい）として政道をとりはからはるべし。」とぞ申し遣わしける。

急ぎ立ち越へて、よかろうとは四人の事、ご苦労とは五人の事也。飛魚石門、「委細かしくまりました。ついひと飛びでござります。」

【語釈】○見抜かれ 「見抜く」で、偽りなどを見やぶって裏面の真相を知る。隠されているものまで感知する。見すかす。○所詮（多く下に打消の語をともなって）どのようにしても。どうせ。到底。

○ちくう 語義不明。○城郭 ある場所を敵の攻撃から守るために設けた防衛施設。軍事的構造物。とりで。○兵糧 将兵に給する糧食。兵食。○籠城 敵に囲まれて城にたてこもること。○賢慮 賢明な考え。○仰せこさるる 「仰せこす」は「言い越す」の尊敬語で、言つてよこされる。○管領 ここでは「くわんれい」だが、「くわんりやう」ともいう。土地や人間を管理、支配する人。また、その職。○立ち越へ 出かけていく。○ご苦労 他人の骨折りを感謝することば。たいぎ。○委細 すべて。細かいことまですっかり。○かしこまりました 相手を高めて、「承知した」「わかった」という意を、丁寧にあらわす挨拶のことば。○ひと飛び 一回飛ぶ

だけの距離や時間。ひとつとび。○ござります 補助動詞「ある」「いる」の丁寧語である「ござる」をさらに丁寧にした語。

（一丁裏・二丁表）

蛸の入道、案に相違して大きに喜び、何の思慮もなく早々に出仕いたしけるが、すでにお廊下へさしければ、不思議や八本の足、心のままに動かず、踏みしめんとすれども自由ならず。かの計り事の灰にまぶれて、吸いつく事叶わず。「さては謀（たばか）られしが残念さよ。」と、奥をめぐけて行かんとする時、一間（ひと・ま）の内より声高（こへ・たか）く、「如何に入道、年頃の積悪、思ひ知つたるか。」と呼ばわって駈け出（いづ）るは、伊勢海老蔵、荒海、家に伝わる大太刀（だち）抜くても見せず、入道が頭目（たう・もく）かけて切りさげたり。さすがの大蛸も急所（きう・しょ）の痛手うけだち、しどろに逃げ回り、たたみかけかけ、散々に斬りつくる。小太郎殿をはじめ、皆々、海老蔵が荒事を感心ある。

如何に入道、天運しゅんかんして茹でて帰らずと知らずや。君を掠（かす）めし天罰、「気味よいよい。誰かある、正月の用意用意意。」「生姜酢（せう・が・ず）は神田までござったあ。」
「ああ、面もねへ。」

「面もねへとは先代萩で聞いたようだが、煮売屋の軒（のき）に尻（かばね）をさらすか。ゑゑ、残念な。」

【語釈】○案に相違し 予想がはずれる。考えていたのと違う。

○大きにはなはだ。たいそう。大いに。○まぶれ 「まぶれる」

「まぶる」は一六世紀ころから用例がみられ、「まみれる」におなじ。泥やほりなど、きたないものが一面についてよばれる。○さては

事情や状況、また、相手の発言や行動などで、思いあたることのあ
る時に発する語。蛸の入道は当初、小太郎に自身の悪行を見抜かれた
ために何らかの処罰を受けるだろうと覚悟していたにもかかわらず、
予想がはずれ咎めなしの知らせをうけた。喜んだのもつかの間、実際
には油断させるための謀略とわかり、この語を発した。○奥 本作
は歌舞伎仕立てになっており、登場人物の名も歌舞伎役者を意識した
ものとなっている。そのため、舞台に対する楽屋、また、
舞台上手から楽屋への出入り口をさす。○めがけ めぎす。○一
間 歌舞伎・人形浄瑠璃で、上手の障子または襖で囲った座敷、部屋
などの称。○積悪 積み重なった悪事。ここでは「せきあく」だが、
「しゃくあく」ともいう。○呼ばわって 大声で言う。呼ぶ。○
大太刀 大太刀を佩(は)いて舞台にあらわれるところから、市川流
の荒事(あらごと)の異称となる。本作では、市川海老蔵をもじった
伊勢海老蔵が登場する場面で、下巻一丁表「事荒だてなば」や一丁裏
「荒海」をうけ、大太刀が登場する。○抜くても見せず すばやく
刀を抜くさまをいう。○頭目 頭と目。ここでは「たうもく」だが、
「ずもく」ともいう。○切り下げ 上から下へ切る。ここでは大太
刀で切りおろす。○急所 体の中で、そこを攻められると命にかか
わる大事なところ。○しどろ 秩序がなく乱れていること。乱雑で
あるさま。○たたみかけ あることを続けざまにおこなう。相手に
余裕を与えず、やつぎばやに働きかける。○散々に 物事の程度が
著しいさまをあらわす語。いろいろとひどく。はなはだしく。○荒

事 歌舞伎で、扮装と演技とが象徴的に誇張された豪快な演出法、ま
た、そういう脚本をいう。元祿年間(一六八八〜一七〇四年)、初代
市川團十郎が金平(きんぴら)浄瑠璃の操りにヒントを得て創始し、
以来市川家の家芸となり、江戸歌舞伎の特色となる。ここでは前述の
大太刀をうけてこのように表現する。○感心 こちらが心を動かさ
れるほど、行動、態度、状態などがりっぱだ。ほめたたえられるべき
さま ○誰かある 目下の人を呼ぶときに使用することば。誰かいる
か。○生姜酢 おろし生姜を混ぜ入れた酢。ここでは「正月」とい
うことばを受けて、また蛸料理に縁のある酢を掛けて、このように表
現している。○神田 生姜酢をうけて、酢をあつかう醤油酢問屋伊
勢屋の所在地として表現している。また、伊勢海老蔵の荒事と伊勢屋
の屋号とを掛けている。○面もねえへとは先代萩で聞いた 「面も
ねへ」は「面目」がないことをいい、「面目」は「めいぼく」とも読
んだ。転じて、歌舞伎脚本および浄瑠璃で知られる『伽羅先代萩』の
「伽羅(めいぼく)」に掛けている。『伽羅先代萩』は、万治・寛文年
間(一六五八〜一六七三年)に仙台の伊達家で起こったお家騒動を扱っ
た時代物。○煮売屋 屋台や店舗などで、飯と惣菜用の野菜、魚、
豆などの煮物を買ったり食べさせたりするのを業とすること。また、
その店や人。○屍 死人のような状態になった者をののしってい
う語。ここでは蛸の入道をさしている。

(二丁裏・三丁裏)

残りたる蛸ども、今は立てこもるべき力なく、貯へ置いたる唐の芋を
面々に分け取りて、俵にして担ぎ、また包みにして背負い、忍び忍び

に城を出で、暗きにまぎれ、落人（おちうど）の人目を包む風呂敷に、欠かせどおのがなりふりの、いば出会いははや昔、妹（いも）は親身（しん・み）の夫婦（めうと）愛、その通い路の数々も、九十九軒の寺々に、芋を背負（しよ）ったも今道心。

道中双六の虎が石といふ身で担ごう。

「あゝ、迷うたりたり。」
「如何こういふ身で歩くと、鳶沢町のあさっぱらとこへるの。酢蛸で道中がなるものか。」

「蛸、生蛸の用意はどうだ。」

「蛸はお芋の使いもの、朦朧（もふ・ろう）なるからに、飯蛸に炊いた子でござんす。」

「新場のさよながさんのところへでも行かふに。」

「智恵は浅いが、欲が深いのふ。」

【語釈】○立てこもる 城の中にいて敵に対抗する。籠城する。○唐の芋 里芋の栽培品種。中国原産のため、この名がつく。ほかに「海老芋」ともいわれ、蛸が伊勢海老蔵に征討されることを暗喩する皮肉か。○落人 戦いに負けて逃げて行く人。また、人目を忍んで逃げて行く人。○人目を包む 人目をばかる。人に見られることをさきらって隠す。「包む」の縁で後ろの「風呂敷」という語を導く。

○妹 男性から結婚の対象となる女性、または、結婚をした相手の女性をさす称。ここでは芋と蛸とのとりあわせを夫婦に見立て、「いも」の音につうじる「妹」と掛けている。直前にみえる「いば」は「蛸」の縁で、この語もまた「いも」の音に類似するためもちいるか。

○今道心 仏道にはいったばかりの人。出家して間もない人。○道中双六 絵双六の一種。東海道五十三次を、順次、うず巻形に描き、振出しとして下端に江戸品川を、上がりとして中央に京都をおく。

○虎が石 形が虎の姿に似ていたり、虎のような斑点があったりする石。また、その石にまつわる伝説。一般には、女の一念が凝り固まって石に化したという、大磯（おおいそ）の遊女虎御前にまつわる伝説をともなっている場合が多い。○鳶沢町 現在の東京都中央区日本橋富沢町。江戸時代初期の「盗賊の三甚内」の一人ですりの親分の鳶沢（とびざわ）甚内が召捕られたとき、徳川家康が命を助ける替りに、他国からくる盗賊を見張るよう命じて、甚内と手下にまだ茅原であったこの土地を与えた。同時に稼業として古着売買を一手に扱うことも許して鳶沢（とびざわ）町を立てた。寛文年間（一六六一〜一六七三年）には富沢（とみざわ）町と書くようになり、町内に古着市も常時立つようになり、日本橋の魚河岸、神田多（た）町の青物市とともに江戸の名物になった。○飯蛸 マダコ科の蛸で、春、卵をもっているものを煮ると、胴に飯粒が詰まっているようにみえるのでこの名がある。「炊いた子」とあるのはこの卵をさすか。○新場 現在の東京都中央区日本橋一丁目の東端。江戸時代、延宝二（一六七四）年、江戸日本橋の魚河岸から分かれて、同本材木町に新しく設けられた魚市場。

（三丁裏・四丁表）

大海広しといへども身をおくべきところなく、ここかしこにかいも忍びけるが、その征討きびしければ、蛸ども水中を離れ陸（くが）に上

がり、如何なる池へも身を隠さんとせしを、里人これをみつけ、やれ出たそれ出たと長棹（なが・さほ）にて叩きたふし、皆々、生け捕りになりけり。突き出されたを長棹といふを、これより始まる。

「上がったら煮て食わう、下がったら焼いて食わう、下がったのには煮て蛸があるものだけな。」

「これと知ったら売り蛸へでも行けばよかった。」

「そうさ今じゃあ客はもてらあな。」

「逃げられるだけ逃げて、ひっ返されたらまた逃げるのさ。外じゃあとんだ渡りがつくもんだあ。」

「なあに、今度捕まると確かに売られやすよ。」

「おいらにゃあ、胸ぐらがねへからいいのさ。無事なら寺へやるが、おいらあ、陸（おか）へやるのさ。」

「手がなくても足があるから、床じゃあぶちとるのさ。」

「蛸では格別がっかりします。」

【語釈】○長棹 江戸時代、遊女が客を冷淡にあしらうこと、あるいは客と縁をきること。また、客の方から遊女と縁をきるのにもいう。舟を岸から突きはなすところからいうか。○とんだ 思いがけないという気持をこめながら、下の記述を強調することば。たいへんにひどく。○渡りがつく 交渉が成り立つ。話し合いがつく。○もんだ 現在の事実や心境について、感慨をこめて物事を詠嘆的に述べる。○胸ぐらがねへからいいのさ 「胸ぐら」は着物の左右の襟が重なって合わさるあたり、むなもとをさす。蛸は頭の下にすぐ足があるので、胸ぐらがないと表現している。ここでは蛸を女性に見立てて

遊所へ売るといふ話題のため、胸がなければその対象から除外されるということか。○床 ふとんを敷いたねどこ。また、男女の共寝。

○格別 物事の状態、性質などの度合が普通よりはなはだしい意であらわす。とりわけ。○がっかり 落胆したさま、失望したさまをあらわす語。がっかり。

（四丁裏・五丁表）

されば蛸のとれる事、幾千万といふ事なく、ことに芋を背負（しよ）いければ大のかさばりものにて持ち扱ふのところ下がり、馬場の煮売屋の面々、芋蛸ともに買い取り、ぐっと腕上げて串に刺し、「芋蛸四文」と筆太（ふれ・ぶと）に見知らせける。珍しき取り合わせなりとて売れる事、十千万願（と・ち・まん・ぐわん）といへども、比ぶるに足らず。

猶、酒の肴なぞに重宝なれば、「芋食って、蛸食って、飲んだとやあ。」と歌ひ罵りけり。君命（くん・めい）を軽んじたる報いとはいいながら、わづか四文の浦波に汚名をながすぞ、うたてけれ。

したはないりに白波の、寄る辺定めぬ苦海の舟の、聞取法聞（きき・とり・ぼう・もん）はこころが雑でいいこみへたり。

「銭をやりなさへよお。」

「おい、帰りに隣に持ってこう。」

「代官（でへ・くわん）も口が悪し。今夜あでも帰って、たどんでも抱くべえ。」

「なかつへそくりに行くべえ。」「しゃあねへ。」と、「うう、もちろんさ。」「もふ五日でしまつて、こっさり決めよう。」

担がれていくは飯蛸、「しばもぬけると下男が悪いの。」

(五丁裏)

【語釈】○幾千万 数千とも数万ともはつきりしないが、非常に多くの不定・疑問の数。 ○背負い 人が物を背にのせてささえ持つ。さらに、ここでは蛸が籠城時の食用として備蓄していた唐の芋を銘々で分け、背負って逃げたことを、後文で「大のかさばりもの」と表現している。 ○馬場 地名と考えられるが、具体的な場所は不明。 ○十千 数の多いさまをいう。 ○万願 さまざまな願い。直前の「十千」は「万」の縁か。 ○酒の肴 酒のつまみ。飲酒する際の副食物。

○重宝 便利であること。都合がよいこと。 ○歌い罵り 大声で歌う。にぎやかに歌う。 ○君命 主君の命令。ここでは蛸の入道が八代龍王の命をさす。 ○汚名 不名誉な評判。悪名。 ○苦海 この世の苦しみの際限なく大きいことを海にたとえた語。苦界。 ○聞取法聞 自分が考えたのでなく、他人の説を聞いて、それを自分の説として発表すること。受け売りすることの意。 ○口が悪い 言う内容のたかがわるい。また、憎まれ口をきく性質である。 ○たどん

木炭粉や石炭粉を布海苔(ふのり)、角叉(つのまた)などで球状に固め、乾燥させた黒い燃料。火気が柔らかい。火鉢、こたつ、あんななどの灰に埋めて使用する。たんどん。 ○なかつへそくりにいふ 語義不明。 ○もちろん 言うまでもなく自明であること。無論。

○こっつきり 数詞などについて、ちょうどそれだけ、と限定する意を表わす。かっつきり。ここでは「五日」をうける。 ○下男 雑用などをするために雇われている男。下働きの男。めしつかいの男。

蛸の一族は陸(くが)に生け捕られ、これに与(くみ)せし鮫の二類、蒲鉾屋が包丁に命(めい)を落とす、わきだるの内に屍(かばね)をさらし、手強(て・ごわ)き鯨は熊野浦に滅び失せぬ。亀之進は鎌倉の山中に忍びいたりしを召し返し、忠臣の面々、皆をそれぞれに御褒美を亀が住処(すみか)をかめらやつと名付け、ためし目出度き萬世(よろづ・よ)の、色も変はらぬ千歳の松、平らに治まる四海、波静かなる春の御慰み、芋蛸の故事来歴、ちょっと一口あがってごろうじろ。

春朗画

【語釈】○与せし 「与する」は、仲間となり加勢する、味方する、協力する。 ○蒲鉾屋 かまぼこを製造したり販売したりする店。また、その人。 ○包丁 (「ほうちょうがたな(包丁刀)」の略)料理に使用する刃物の総称。 ○わきだる 語義不明。 ○手強き 「手強い」で、相手として骨が折れる、容易にうち勝てないほど強い。

○熊野浦 和歌山県最南端の潮岬から三重県志摩半島大王崎にかけての紀伊半島南東岸の海域を熊野灘という。とくに和歌山県東牟婁郡(ひがしむろ)郡太地町を拠点に、近世期には捕鯨が盛んだった。 ○かめらやつ 語義不明。 ○褒美 ほめて与える金品。賞与。褒賞。 ○ためし目出度き萬代の ここから「春の御慰み」まで、万歳のうたう賀詞となっており、物語の大団円をかざる。 ○故事来歴 昔から伝わってきた事物についてのいわれや歴史。 ○ちょっと 時間、物

事の量や程度がわずかであるさまを表わす語。ちっと。すこし。○一口 「ひとくち」で、一回、口に入れること、また、その分量、また、少しばかり飲み食いすること。なお、現在の京都府久御山町に、同字で「いもあらい」と読む地名がある。「芋蛸の由来」ということで、この「いもあらい」を掛けるか。○春朗 勝川春朗。のちの葛飾北斎。

3. 抄訳

人の道にはずれたことをして得た富貴とは、まるで浮雲のようにはないものだ。正直に生きていれば、きつといつかは神仏の加護を受けるだろう。

龍宮城の支配者は七代龍王であり、温和な性格であった。そしていつの頃からか、八本の足を持つ蛸の入道が台頭してきた。従順なふりをしていたが、実は悪賢く、口先が巧みであった。七代龍王は蛸の入道を深く信頼して、政治を一任した。そのため、代々仕えてきた良識ある家来の魚介類は、蛸の入道を憎んでいた。

ある時、七代龍王は病に臥せった。龍王付きで身分ある医師の鱸(すずき)の大庵や烏賊(いか)の甲庵をはじめとして、医師に心得のあるものを身分問わず呼び寄せた。だが、容態は一向に快復しなかった。烏賊の甲庵は、「乙姫様の以前の病状と類似している。今回も猿の生肝を用いて薬を調合すれば、すぐに快癒するだろう。」と見解を述べた。

先例にならって、老臣の万代(ばんだい)亀之進が、その役目を受ける形で評議が進んでいた。その時、蛸の入道が「生肝をとられた猿の子孫は、現在も野山で繁栄していると聞く。親猿の命を取られた怨恨はあるだろうから、良薬とはいえ、調合は到底困難だ。他のものが対応するのがよい。」と弁舌滑らかに主張したため、異論を唱えられないものはいなかった。

その時、伊勢海老蔵が強硬に反論した。「一理あるが、万代亀之進殿だからこそ、背中の人を乗せることが可能だ。乙姫様のお相手である浦島殿を龍宮城へお迎えできたのも、亀之進殿のおかげである。七代龍王の命令に従い、本件も亀之進殿へお願いするべきだ。」との伊勢海老蔵の主張に、蛸の入道も声高に応酬した。

七代龍王は激昂して、「政治をうまく采配する蛸の入道の言うことはもっともだ。それを争うなど、とんでもない。」と伊勢海老蔵を叱責した。口先がうまく悪賢いものが栄え、忠実な臣下は職を辞する結果となったわけである。忠義に厚い老臣の万代亀之進はそれを伝え聞き、伊勢海老蔵の将来を気の毒に思い、蛸の入道にあくどさを憎んだ。引退の時機と考えた万代亀之進は、和歌を一首残して、身内と共にひそかに姿を消した。

さて、今や誰はばかることのない蛸の入道は、龍王の命令を受けて、地上に詳しい不忍池に住む鼈(すっぽん)を、猿の生胆を取らせるために派遣した。任務のため、鼈が地上で歩いていたら、思いがけず鰻屋の大きなたらいに躓いて、大きな音を立ててしまった。屈強そうな若者が出てきて、「なんと大きな鼈だ、今日は思いがけず儲かったぞ。」と鼈を捕まえて、よく磨いた小刀でずたずたに捌いた。昨日

まで平和に暮らしていた鼈は、突然、まな板の上で命を落として、食べられてしまった。

この事情を知らずに鼈の帰途を待ち続けていた蛸の入道は、音沙汰がないため、新たに一つの策略を設けた。「鼈は生肝を持ち帰った。」と嘘をつき、海老芋を一つ、壺に入れて、七代龍王へ丁重に差し上げたのであった。烏賊の甲庵が喜んで蓋をとると、猿の生肝ではなく、なんと海老芋であった。七代龍王は蛸の入道へ理由を尋ねた。蛸の入道は、「必死で山猿の胸を切り裂いて生肝を取り出そうとしたところ、山猿が極度に驚いたためか、生肝はつぶれてしまい、海老芋になってしまった。」と、うやうやしく返答した。烏賊の甲庵は不審に思ったが、蛸の入道の有無を言わさぬ態度にのまれて、「それを使っても意味がないであろう。」と述べて、仕方なく退出した。烏賊の甲庵は医療技術を駆使したが、七代龍王は崩御した。龍宮は混乱に陥り、良識ある魚介類たちは嘆いた。

崩御を受けて、娑伽羅龍王をはじめとする龍王たちが龍宮城へ参集して、協議が始まった。七代龍王の一番上の子は乙姫だが、女性のため、その弟が八代龍王として即位することが決定した。しかし、年少のため、乙姫と浦島との間に生まれた水江小太郎が補佐官に着任して、政治を取り仕切ることが議決された。水江小太郎は若者ではあったが、聡明にして人柄も穏やか、万民の敬愛を集めており、国はよく治まった。七代龍王の怒りを得た伊勢海老蔵は赦免となり、身分を回復した。辞意を表して行方知れずとなった万代亀之進の行方も探させた。

蛸の入道は、聡明な水江小太郎に本性を見抜かれた。そのため、鮫と鯨とを味方につけて、戦いのためのとりでをつくり、食料として大

量の海老芋を備蓄して、籠城に備えた。この情報を得た水江小太郎は、計略をめぐらせた。龍宮城内に灰を撒くという細工を施した上で、「先代の龍王の信頼を得ていた蛸の入道殿ゆえ、今の龍王のもとでも政治を取り仕切るべきである。」との旨、蛸の入道へ使者を派遣した。使者の飛魚（とびうお）右門は、「ひとつとびで参ります。」と飛んでいった。

この知らせに安堵した蛸の入道は、即座に龍宮城へ出仕した。すると、撒かれた灰のため、八本の足が意に反して動かず、踏みしめることができず、身動きがとれなくなってしまった。蛸の入道が「はめられた。」と分かったまさにその時、「永年の数々の悪事、思い知ったか。」と叫んで駆け出したのは伊勢海老蔵、家伝来の大刀をすばやく抜き、頭と目をめがけて切りつけた。さすがの大蛸も急所を攻撃されて、必死で逃げ回ったものの、続けざまに切られてしまった。伊勢海老蔵の豪快な剣さばきに、水江小太郎をはじめ、みな賛嘆した。

もう、蛸一族の残党には、籠城して抵抗する力はなかった。とりでに備蓄してあった海老芋を担いだり背負ったりして、蛸一族は夜陰に紛れてちりぢりに逃げた。逃亡先は海から陸地へと及んだ。どんな池にでも隠れようとした。だが、里人に見つかり、生け捕られた。そこで、惣菜屋たちが、この山ほどある蛸と海老芋とを買い求めて、串に刺した料理を作り、安価で売り出したところ、珍しい組み合わせだと評判になって、売れに売れた。八代龍王の命令を軽視した因果応報とはいえ、悪評で終わるとはあわれなものだ。

こうして、蛸一族は陸地で生け捕りにされたほか、蛸一族に味方をした鮫一族は蒲鉾屋で命を落とし、鯨一族は捕鯨で有名な熊野浦で滅

亡した。一方、忠臣の万代龜之進は、鎌倉の山中に隠遁していたところを見つけ出されて、召喚された。忠義を尽くしてきた家臣たちも、褒美を得た。誠に素晴らしくめでたいことよ。

世に流通している芋と蛤との料理の取り合わせは、こうした経緯によるのである。みなちま、むじむじ一口、召し上がれ。

4. 英訳

Shinpan Tatsu-no-Miyako Sentaku-banashi: Imo-tako no Yurai

Wealth and honour obtained by dishonest means are like floating clouds. Honesty shall receive divine protection in the end.

The lord of the Dragon Palace, called Dragon King VII, was by nature gentle and benevolent. But Tako-no-Nyūdō, through cunning and flattery, cleverly won over him. Allured by eloquence, the Dragon King entrusted Tako-no-Nyūdō with the government of the sea. As a result, the hereditary vassals and sensible fishes hated Tako-no-Nyūdō.

Now the Dragon King was laid up with illness. A Japanese sea bass named Taian, who was a wellborn physician to the king, a squid named Kōan, and all those who had mastered the art of medicine, high and low alike, were summoned to the

palace. But the treatment was of little effect. Then the squid Kōan said, "This is exactly like the condition of Princess Otohime which arose before. Once again the medicine made from a liver from a living monkey should bring about immediate recovery."

The conference concluded that, following the precedent, the same tortoise, now a senior vassal, whose name was Bandai Kaménoshin, should be appointed to the task. Just then Tako-no-Nyūdō stepped forward and said, "I hear that descendants of the monkey killed for his liver still live on hills and dales. They will surely take revenge for the murder. If so, it would be difficult to compound the good medicine. I insist that this should be assigned to someone else." Hearing his fluent speech, no one could utter a word against it.

Then Isé Ebizō refuted his argument: "There is some truth in the words. However, no one but Bandai Kaménoshin can carry a person on the back. That is how Urashima, the beloved husband of our Princess Otohime was brought to the Dragon Palace by Lord Kaménoshin. The role should be assigned to Lord Kaménoshin according to a royal edict." As Isé Ebizō argued thus vehemently, Tako-no-Nyūdō retaliated with rage.

This incurred the wrath of the Dragon King, who rebuked Isé Ebizō: "The speech of Tako-no-Nyūdō, who governs well, makes good sense. It is unreasonable for you to argue with him." Thus a crafty fish swims with the tide, while a faithful

fish withdraws with good grace.

Having heard about the course of events, Bandai Kaménochin was concerned about Ise' Ebizō's future. He also detested Tako-no-Nyūdō's dishonesty, and thought that now was the time to retire. Thus he gathered his family and dependents, and secretly set off, leaving a *waka* poem behind him.

Now Tako-no-Nyūdō, by royal order, openly sent a *suppon*, or a soft-shelled turtle, to Japan to obtain a liver from a living monkey: *suppon* was from the Shinobazu Pond and was familiar with the land. Walking around on business, he bumped carelessly into a tub in front of the eel shop. A sturdy young man came out of the shop and said, "What a big *suppon* this is! I am blessed with unexpected profit today. Come on." Instantly the man caught him by the rump. Cut to pieces with a well-sharpened knife, he lost his life in a hot pot. Until yesterday he had lived happily. Today he lay on a chopping board, and vanished like the dew.

Tako-no-Nyūdō had waited eagerly for the *suppon's* return, but he did not come back. In no time he wove a plot. Having announced that the *suppon* had brought back a liver taken from a living monkey, he placed a taro in a jar, and respectfully carried it to the royal presence. Kōan the physician gladly lifted the lid, but found a taro instead of a liver. The Dragon King asked for the reasons. "The *suppon* fiercely cut

open a wild monkey," explained Tako-no-Nyūdō, "but the monkey was so astounded that his liver was crushed and changed into a taro." Kōan the squid observed him with suspicion. However, overwhelmed by the octopus' spirit, he only responded that it would be useless to use it, and withdrew from the royal presence reluctantly. Kōan's exquisite skill was in vain, and the Dragon King passed away. The court was thrown into disorder, and sensible fish in the sea lamented.

When Dragon King VII died, eight great dragon kings including the dragon king Sagara met at the court to hold a council. Because the eldest child was Princess Otohime, they recommended her brother, the crown prince, to accede to the throne as Dragon King VIII. Besides, as the new king was very young, they decided to appoint Mizunō-no-Kōtarō, born of Princess Otohime and Urashima, to be adviser to the king so as to govern the whole sea, for the prince was wise though young. As Kotarō was gentle and polite, and kind to all the fishes, the four seas were at peace. Ise Ebizō, who had fallen under the former king's displeasure, was now pardoned and ordered to labour at his loyal service, and was appointed to search for the lost Kaménochin.

Looked through by Kotarō, Tako-no-Nyūdō colluded with sharks and whales to build a castle offshore, in which they stored provisions of taros (*imo*) and holed up. But Kotarō

was so wise as to take care not to muddy the waters. With a subtle stratagem he sprinkled ash over the floor of the palace, and sent a messenger to Tako-no-Nyūdō with the words: "Since you gained the late king's favour, it is the will of Dragon King VIII to appoint you by custom to govern the state." The messenger, who is a flying fish named Tobiuo-umon, set out at once, saying, "It's just a hop."

Tako-no-Nyūdō was overjoyed and immediately went to court. Having entered the palace, however, he could not move his eight legs, nor could he stand firmly. The ash sprinkled around made it impossible for him to stick to the floor. "I've been trapped, haven't I?" cried Tako-no-Nyūdō with regret. He heard a loud voice, "Now, after many sins, have you learnt your lesson?" Just then Isé Ebizō rushed at him. Drawing the sword handed down in his family, Ebizō cut Nyūdō on the top of the head. Struck home, he could do nothing but defend and dodge. Ebizō followed him up and slashed him soundly. All the others including Mizunoe-no-Kotarō cheered Ebizō's heroic action.

The remnants of the octopus' family no longer had power to entrench themselves. They shared the taros that they had stored, and shouldered them, or carried them on the back. Stealing out of the castle, they went into hiding under cover of night as fugitive warriors.

Though the sea is wide, there is no place to hide. They went from the sea to the land, looking for whatever pond they could hide in. But villagers found them and captured them alive. Thus thousands of octopuses were caught. Because they were carrying *imo*, cooked-food vendors bought both *imo* and *tako*. They boiled them on a skewer, which they sold at a low price. As a new combination, "imo-tako" sold well. Though the octopus payed the penalty for his neglect of his lord's orders, it was deplorable that he should have ended his life with disgrace.

The octopus' family was caught alive on land. Sharks that sided them lost their lives by the kitchen knife of a *kamaboko* maker. Whales, who had been formidable opponents, fell on the seashore of Kumano-ura famous for whaling. Bandai Kamenoshin was called back to the court when hiding in a hill in Kamakura. All the loyal vassals were rewarded. The world is at peace and the sea is calm most auspiciously.

This is the origin and history of *imo-tako*. Do have a little.

謝辞 本稿作成にあたり、小山元孝氏、小室智子氏、吉野健一氏へ謝意をあらわす。糸井文庫の閲覧および本稿への掲載を許可した舞鶴市へ謝意をあらわす。舞鶴市・立命館大学アート・リサーチセンター作成DB閲覧に伴い、立命館大学教授・赤間亮氏へ謝意をあらわす。

<https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/maiduru/index.htm>
(2019年11月最終確認)

日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）「17K02438 舞鶴市糸井文庫蔵浦島伝説関連資料の基礎的研究」の助成を受けたことを記し、深甚の謝意をあらわす。